分　科　会	中（公民②）	郡　市　名	岡　　崎
提　案　者	岡崎市立東海中学校		近藤　雄一

研究題目

持続可能な社会の実現を目指し，学びを問い合い，自己の責任を考える社会科の授業

―3年生公民単元「地球環境について考えよう」の実践を通して―

１．研究のねらい

2010年10月,生物多様性条約第10回締約国会議が地元名古屋で行われた。この会議は1992年国連環境開発会議で採択され,今回で10回目,現在193の国と地域が加盟している大きな国際会議である。今や，環境問題は国や地域が個別に対応していく時代は終わり，世界的な視点に立ち，事象を見定めなくてはならなくなったといえる。しかし，環境問題が生徒たちにとって，これからの社会の重要課題になっているという切実な実感を持ち合わせていないように感じる。そのため，これからの地球市民として生きていく生徒たちは，環境問題にアンテナを高くし，人間の営みが自然と調和していくために，何ができるか考えることは重要になってきている。そこで，研究テーマである「持続可能な社会の実現を目指し，学びを問い合い，自己の責任を考える社会科の授業」を以下のように考えた。

＝持続可能な社会の実現＝

持続可能な社会を「地球環境の悪化を防ぎ，人間生活と両立しながら地球環境の回復を続けることができる社会」ととらえる。地球規模の大きな問題も，まずは一人ひとり何ができるかを考えることで，よりよい社会の実現を目指すことにつながる。

＝学びを問い合う＝

確かな調べに基づいて，自分の考えを仲間と関わらせて，社会事象をとらえ直し，自分の考えを見つめ，自分の考えの確かさや変容に気づくことができる。

＝自己の責任を考える＝

地球環境について現在の問題点を理解し，今後の生徒個人の暮らしのあり方に対して，自分ならば何ができるか考えることができる。

本研究でめざす生徒像は，

① 地球環境についての視点から，自分の考えを仲間と関わらせる中で，自らの考えを見つめ，自らの考えの確かさや変容に気づくことができる生徒。

② これからの　暮らしの中で，自分なら何ができるか主体的に考える生徒。

である。

実践単元を「国際問題と地球市民」から「地球環境を考える」「市民が支える環境問題」を抜き出し，特設単元「地球環境について考えよう」とした。環境問題は世界的規模で何らかの行動を起こす必要性と，それぞれの国の思惑も含まれ考えられていることを生徒は知る。地球環境は今後の世界の方向性によって，より深刻な問題を引き起こす可能性があること実感する。ただ，生徒が実感をしても COP10 で話し合われたことは，生徒の身近な生活に降りてきているとは言いがたい。そこで，東海中学区の自然環境について視点を焦点化する。

学区の自然環境も，自然の開発が進み，野生生物と人間生活との関係に問題が生じてきていることが浮き彫りとなる。環境問題が，実は生徒個人の身近に存在することを知り，自分自身の問題としてとらえ，真剣に考えていくことができるのではないだろうか。

２．研究の内容と方法

(1) 研究の仮説

① 異なる立場の知識や考えを知り，それぞれの考えを交し合う場を設ければ，自分自身の考えを再構築し，今後の環境問題のあり方を多面的に捉え，主体的に自分自身では何ができるかを考えることにつながるであろう。

② ４から 5 人のグループでの意見交換は，クラス全体でのそれよりも身近な雰囲気で気軽に話し合うことができる。したがって，個々の深い調べ学習から，グループで意見交換を行えば，仲間の調べから追究したい課題を多面的な視点から捉えることや，自分の調べを見つめ直し再構築することができるであろう。

③ 教材との出会い，課題設定の場面や学習の場面において，新聞記事，ニュース映像，現地写真，統計資料などを利用し，生徒が抱いた疑問や考えをもとに追究を進めたり，身近な学区の自然環境を考える視点から地球規模の視点へと思考の深化を計ったりすれば，高い興味関心をもって単元に向き合い，環境問題は身近な自分自身の問題として追究意識は高まるであろう。

(2) 仮説検証の手立て

① 環境問題を多面的な視点で捉えて考えるために，開発を進める視点，環境を守ろうとする視点，被害を受けている人，開発で利益を得る人など，異なる立場の考えに立って話し合いに参加させ考えを深めさせる。

② 個々の調べ活動を深め，自分の調べを再確認することや仲間の調べの中から多面的な視点を持って話し合いをすすめていくために，４，５人のグループで発表の場を設ける。

③ 身近な学区にも地球環境と同じような問題が発生していることを知り，自分自身の問題として高い問題意識や追究意欲を持たせるために，COP10 の内容を新聞記事，公民通信などで取り上げたり，学区の自然や開発の状況をイノシシ被害統計や現地写真，東海中の自然科学部の活動資料を紹介したりする。

本研究では，環境問題の理解，環境問題に対する国際協力の枠組み，学区の自然環境の現状を把握，自分自身ができることを考える場，生徒相互のかかわりあう話し合いの場などにより，自らの考えが深まるであろうと考え，次のような単元計画を立てた。

【単元計画】（６時間完了）

学習課題	学　習　内　容	手　立　て	生　徒　の　変　容	時間
ＣＯＰ10 って何だろう	・ＣＯＰ10 はなぜ開かれたのか知る。 ・生物多様性の意味を知る。 ・生物多様性についての取り組みを把握する。 ・環境問題も大きな原因の一つであると知る。 ・一人調べのテーマを考える。	手立て③ COP10 新聞資料 公民通信	・ COP10 の内容を思い出し確認した。 ・ COP10「生物多様性」から興味をもったテーマについて調べる必要性を感じた。	1
どんな問題が起きているのか把握	・ＣＯＰ10 で話し合われた生物多様性問題をそれぞれ項目ごとに把握し，問題に対して自分の考えを持つ。 （絶滅危惧種　外来種　遺伝資源　里山	手立て② グループでの意見交換	・生物多様性を核に環境問題を多面的に捉えることができるようになった。 ・自分自身の問題として捉	1

する	地球温暖化　開発） ・一人調べからの共通理解をはかる。		えることができない。	
東海中学区の自然環境を考える	・学区の自然環境の現状を把握する。 学校の周りに残る豊かな自然（校舎から見える四季） 大幡地区にできた東部工業団地や藤川駅前にできる道の駅 自然科学部のカワバタモロコの現状。（部活の活動を知る） 学校の裏山の畑のイノシシの被害。（被害者へインタビュー） 北高コスモサイエンス来校で調べた東海中裏山の土壌。（参加者の発表） ・東海中学区の人間の生活と生物多様性について考え，自分ができることについて話し合いをする。	手立て③ 学区の自然環境資料 自然科学部の活動 コスモサイエンス資料 学区のイノシシ被害 手立て② グループでの意見交換 手立て① 多面的な視点で話し合い	・ 学区の環境問題点の把握。 ・ イノシシ問題の焦点化。 ・ イノシシ問題だけでも解決困難な問題と把握 ・ 個人のできることの限界と国や地方の対策の必要性を感じた。	2
これからの地球環境について考えよう	・学区で起きていることは地球環境で起きていることと同じであると認識する。 ・地球環境問題の対策として国際協力の枠組みを知る。 国連環境開発会議　地球温暖化防止京都会議 ・個人の力を集めて国際的な地球規模の協力がこれから大事になってくることを知る。	手立て② グループでの意見交換 手立て① 多面的な視点で話し合い	・ 国や地方の対策でも，問題解決は簡単ではないと感じた。 ・ 国の対策でも，結局は個人の小さな力が必要になると感じた。 ・ 私たちの問題として私たちのできることを考えた。	2

３．研究の実際

(1)「COP10 って何だろう」(第 1 時)

単元の最初に，昨年名古屋で行われた COP10 で知っていることを発表させた。総合的な学習の時間でも取り上げていたこともあって出てきた意見は,「名古屋で開催」「生物多様性」「2010 年 10 月」「名古屋議定書」「いろいろな国と話し合う」など多岐にわたるキーワードが出た。A 男は,「2010 年 10 月」を発表した。その後，なぜ COP10 が開かれたのか理由を発表させた。総合的な学習の時間で触れてきたところであるので，出てきた意見は「人間が自然を切り開いてしまって生物の住む環境が変化した」「生物多様性が失われている」であった。ここで，COP10 のキーワードは「生物多様性」であると確認できた。そこで,「生物多様性」とは，どういうことかを考えた。「さまざまな生物がお互いに影響し合って暮らす」という意見から,「影響し合って暮らす」ことの具体例として,「人は，リンゴの受粉にハチを使う」という意見が出た。さまざまな生物がお互いに守ったり守られたりする関係が生物多様性ではないかと見えてきた。現在その生物多様性が失われてきている。しかし，どのように「生物多様性」が失われてきているかがなかなか見えていない生徒が多かった。そこで生徒は，COP10 から導き出される環境問題,「生物多様性」をキーワードとして，もっと詳しく生物多様性をおびやかしている原因を調べる必要があることを実感した。そこで，個々にテーマを決めまとめることとした。A 男は,「絶滅をくい止める方策」の観点で調べをすすめることにした。

テーマ　「絶滅をくいとめるために」
授業の中で，1 日に何百種と生き物が絶滅していると聞いて，そんなに絶滅しているのかと驚いたと同時に，なんでそんなにたくさん絶滅するのか，どのように止めようとしているのかという疑問が浮かんできた。（資料 1　授業を終えて A 男の追究テーマ）

(2)「どんな問題がおきているのだろう」(第 2 時)

個々のテーマについて一人調べを行い，そのテーマを持ち寄り関連付けできるように，4 人のグループを作り，その中で自分の調べた内容を発表し合う活動を行った。個々に調べた内容は，4 人ともまちまちであったが，自分の調べたテーマを端的に分かってもらおうと，資料をもとに意欲的に説明する姿が見られた。(資料２)他人に理解してもらうために言葉を精選して説明する必要があり，自分の調べを振り返る機会になったと感じる。また聞く方も，事象について多面的に捉えることができるように自分が調べたテーマに触れる発表にはメモを取るように指示をした。

資料２　グループ活動

そして，グループの発表を経て全体に広げ，調べたテーマを内容ごとに選別すると「生物の絶滅と対策」「自然破壊（環境破壊)」「生物多様性」があがってきた。A 男は,「生物の絶滅と対策」というテーマを発表した。A 男は，グループで発表できたことを活かし，それぞれのテーマに関連がある内容をすすんで発表できた。

資料 3　(生物の絶滅と対策)の主な発言
C1　1975 年 1000 種の絶滅だが，現在は 1 年で 4000 種が絶滅している。
C2　30 年以内に熱帯の植物 25%が絶滅する。
C3　日本の固有種が外国では外来種として困らせている。
C4　ヨーロッパ･アフリカは絶滅種が少ない。
C5　エクアドルが絶滅種の多さで 1 位。
C6(A 男)　日本では，1993 年絶滅から守るための法律ができた。

「生物の絶滅と対策」では，まず意図的にデータから発表させた。「現在の絶滅種の年 4 千種，30 年前の 4 倍」という発表では生徒の驚きと，将来の悲観的な予想が漏れ聞こえた。その一方で対策については，A 男が発表した日本の法律が一つあげられただけであった。生徒たちは，絶滅の問題が本当に最近話題になったことで，それに関しての対策が遅れている印象を持つことになった。また,「自然破壊(環境破壊)」では，日本の食糧自給率の低さから，外国からの食料の輸入に伴う CO_2 排出量（フードマイレージ）が高いという意見から，地産地消によって CO_2 が削減できるという視点が出た。「生物多様性」では，南北に長く，高度の差があり島国であるため「日本は生物多様性に富んでいる」という意見が，A 男をはじめ生徒への印象が強かった。

資料 4　A 男の授業後の感想
B 君の意見を聞いて，せっかく生物多様性に富んだ国なんだから，日本はもっとこの問題に懸命に取り組んでいってほしいと思った。世界中で生物は危機にさらされている。人間は少しでも多くの生物を次の時代に受け継がせていかなければならないと思う。

感想にもあるように,「もっと日本は真剣にこの問題に取り組むべきだ」「人間は少しでも多くの生物を次の時代に受け継がせていかなければ」という記述から，我々の取り組み方一つで大きく環境問題は変化することを実感できたことが分かる。ただ,ここまでは知識としての実感であり，A 男の感想のように「日本はこの問題に懸命に取り組むべき」と漠然と捉えているだけで，まだまだ自分自身の問題としてとらえているかというと，疑問であると感じた。そこで，生物多様性問題は学区でも発生している身近な問題でもあると捉えさせる必要性を感じ

資料 6　A 男の発表

た。次時では，生徒に「身近にそういう問題はないかな」と投げかけ，東海中学区の自然環境に目を向けさせた。

(3)「東海中学区の自然環境を考える」(第 3,4 時)

今までは，COP10 の「生物多様性」の視点から地球規模で追究してきた。生徒は，生物多様性の鍵は人間が握っているという認識を持つことはできた。ここでさらに生物多様性の問題は私たち一人ひとりの問題でもあることを認識させるため，自分たちの身近な地域の環境である東海中学区の自然を振り返ってみることにした。四季折々の表情を見せる東海中。学校の周りに残る豊かな自然は，生徒が毎日見る風景なので説得力があると考えた。まず，学校や東海中学区の自然環境と開発の様子を提示し知っていることを発表する時間を設けた。開発に目を向けた発表では，「田んぼを埋め立てて藤川に道の駅を造っている」「額田にインターチェンジを造っている」「第 2 東名を造っている」などの発表がなされた。その中で A 男は「山を切り開いてインターチェンジの近くに工業団地を造っている」と発表した。そこで，これらの目的はどこにあるのかを聞くと，「町の活性化をはかるため」と答えた。A 男は，どちらかというと開発の面に目を向けていた。次に，自然についての発表を行った。夏に岡崎北高校コスモサイエンスゼミ特別講座で，学校の裏山の土壌を調べた結果を参加した生徒に発表させた。そこで，裏山の土壌はたくさんの微生物がいるとても良い土であるということが分かった。また，カワバタモロコを自然に戻すために活動する東海中学校の自然科学部を NHK が取り上げたビデオを視聴したり，大幡地区にこの夏設置されたトラの人形を提示して，このようなことをしてイノシシやサルを追い払っている現状を報告したりした。

資料 6　トラの人形

東海学区の開発や自然の様子を概観した後，学校の裏山の畑のイノシシを防ぐ囲いを提示した。生徒には，「なぜ囲いがあるんだろう」という疑問点が沸いてきた。そこで，「イノシシはなぜ畑を荒らすようになってしまったのだろう」を考えていくことにした。C1，C２とイノシシが追い詰められている様子が発表された。さらに，C３，C４に見られるように，人間の開発が引き起こしたという意見が続いた。そこで，「イノシシについてどう思うか」と問いかけた。C５は，核心をつく発言を発表したが生徒は，まだこの意見を受け入れるだけの理解が深まっていない様子であった。そこで，望ましい開発というものを考えさせるために「開発が必要か必要でないか」について考えさせた。A 男は，開発の必要性を感じて「開発は必要である」と答えたが，半数以上の生徒が「必要でない」と答えた。人間の便利さ追究の犠牲になっている生物たちの視点の印象が全体を引っ張っていると感じた。

資料 7　課題の話し合いの主な発言

C1　温暖化が進み，山で食物が減った。
C2　開発が進み住むところが減った。
C3　山より降りてきた方が，効率がいい。
C4　住むところが減れば，食べ物も減るので仕方なく降りてくる。
T　仕方なく降りてくるイノシシについてどう思いますか？
C5　人間が，イノシシとかのことを考えて開発しなければいけない。
T　このような現状があるけど，開発は必要か必要ではないか，どっちの考えをもつ？
C6　イノシシが生きていく場が必要だから開発はしない方がいい。
C7　このままでは，山でも畑でも食べ物がとれなくなって，イノシシが絶滅してしまう。
C8　絶滅種がこんなに多いのに，なぜ開発を進めるのかな？
T　なんで開発が必要なんだろう？
C9　人が楽をしようとしている。
C10 便利を追求しようとしている。

そこで，人間側の被害の視点を感じさせるため，岡崎市で年約一千万円の被害が出ているイノシシの実害と活動範囲も年々広がっていることが分かる資料を提示した。さらに，追い払う対策も取られているが，駆除する対策も取られていること，学区でも年約 100 頭駆除していることを提示し,「追い払うべきか駆除するべきか」について話し合いを進めていった。すると C１３，１５，１６(A 男)のように「人間側の被害」を捉えて，駆除を肯定する意見も出てきた。さらに,C１７では,問題がイノシシだけでないことを示唆することができ，生徒の視点を広げることができた。

資料 8　追い払うか駆除するかの話し合いの主な発言
C11　人間のための開発で，また駆除するのは自分勝手すぎる。
C12　駆除しすぎると絶滅のおそれが出る。
C13　最近絶滅といわれているが，猟師の仕事はあるわけだから，そのまま駆除を続けてもいいのではないか。
C14　仕方なく降りてくるのに，追い払うのは人間の勝手。
C15　イノシシの絶滅の話は聞かないから，このまま駆除しても大丈夫。
C16(A 男)　人の生活を守る程度なら，駆除はかまわない。
C17　開発を進めてしまうと，イノシシ以外の生物にも問題が広がっていくと思う。

授業後の A 男は，授業の途中では，開発に賛成をしていたが，一概に開発をすることが豊かになることではないという意見にかわってくる感想を持った。ただ,「学区は繁栄し，他地域で自然を残す」というような記述から，まだ自分自身の問題として捉えきれていない様子を感じた。そこで次時では，開発の是非と駆除の是非について，自分自身の考えをはっきりさせることを課題とした。

資料 9　A 男の授業後の感想
学区内が開発されてにぎやかになるのは賛成だけど，額田地区は田舎のままでいいと思う。やっぱり近くに町と自然が共存できることが豊かな市への条件の一つだと僕は思う。

第４時では，グループで，開発と駆除について話し合いを行った。自分の考えをグループで話し合うことで，自分の考えを修正・再構築しながら深めることができたようだ。C1 のように「仕方ないが，人間が原因を造っていることを忘れてはいけない」という意見が出たり，C３，４のように「駆除は仕方ない」としたりする意見も見られた。C５のような動物側に立った意見も出た。C８(A 男)は，イノシシだけの問題ではなく，少し視野を広くもちそこの自然環境の生物多様性に立ち返って意見を述べることができた。実際，私たちが考えなければならない生物多様性はイノシシだけではない。この意見は，他の生徒にとって新しい視点を与えるきっかけとなった。この A 男の少し視野を広くもった意見を受けて C9 のような生物多様性を意識した開発という意見が出てきたと考える。この話し合いによって，人間だけの視点ではなく，すべての動物，植物など人間以外の事象を多面的に考えながら開発を進めるべきだと考えられるようになった。

資料 10　開発と駆除についての話し合いの主な発言
C1　駆除は仕方ないが，人間はそれを忘れてはいけない。
C2　駆除して絶滅してしまうのなら，開発はやめるべきだ。
C3　人の暮らしのためには，少しの駆除は必要。
C4　法律の範囲内の駆除のはずだから，絶滅の可能性はないと思う。
C5　絶滅とか関係なしに命は命なんだから，守らなければならない。
C6　駆除するだけでなく，食べればいい。
C7　捕まえて，森が多いところの中に離す。
C8(A 男)　捕まえて離したら，その場所の生物多様性が崩れる。
C9　人間は，他の動物たちを考えながら開発を進めるべきだ。

イノシシ以外にも視点を持つことができるようになった生徒たちに,「自分たちは学区の自然環境に対して何ができるか」を考えることにした。生物多様性について理解を深めた生徒により，自分たちの問題として捉えさせたいと考えたからである。再度，グループを作り話

し合いを行ったのだが，私たちができることを考えるというよりも，イノシシに焦点化しすぎていて，イノシシとその森をどうしたらよいかという話がたくさん出てしまった。また，C1 から C４など，どれも実現が困難なことで，生徒から「難しいなあ」というつぶやきが上がっていた。C7(A 男)の意見は，一見問題が解決したように思えたが，すぐに不備が指摘されてしまった。しかし，イノシシに焦点化した話し合いのおかげで，イノシシだけに対しても私たちは思うような対策を講じることができない問題の困難さを理解することができ，また C５，C６のように「個人の力で対応することの限界」も感じることができた。A 男の感想からも，確かに自分たちでできることを考える中で，個々にできる限界に気付くことができた。自分自身の問題として考える中で，生物多様性にかかる難しい問題と把握できたことに，思考の深まりを感じた。そこで，この解決困難な問題を「誰が，どうすれば解決できるのか」という問いを生徒に問いを投げかけて，次時の課題である国や地方の対策について考えさせようとした。

資料 11　私たちは何ができるかの話し合いの主な発言
C1　人間は森に手を出さない。
C2　森に木の実ができる木などを植える。
C3　動物の嫌いなにおいで追い払う。
C4　イノシシを調教する。
C5　開発による自然への影響を予測して，よしと分かったら開発をする。
C6　自然のバランスを考えた開発をしていく。
C7(Ａ男)　人間の食べ残しを森にまく。そうしたら，廃棄物の問題も解決する。
C8　食べ残しを森にまいたら，野生じゃなくなる。

資料 12　A 男の授業後の感想
　僕たちができることはあるけど，僕たちにできないところがたくさんあるので，国や地方が動かないといけないなと思った。よい案がでても悪い点が出てきてしまうので，これは難しい問題だと思う。

(4)「これからの地球環境について見直そう」(第 5，6 時)

A 男の感想を活かし，「学区でおきている問題は，地球全体でおきている環境問題である」という認識を本人にもたせるため，「個人でできないことをする国や地方の取り組み」を追うことにした。 国際的な協力体制や，環境アセスメントを行って開発が進められていること，ナショナルトラスト運動を紹介した。中でも，環境アセスメントは（資料 11）の話し合いでてきた C５，C６の意見を具現化している対策であり，生徒は，自分たちが考えたことと国が行っていること，地球規模で行われていることに大きな違いがないことに気づくことができた。さらに，「京都議定書」の数値目標をめぐって諸外国の合意がなかなか得られなかったことを知り，自分たちの話し合いの通り，国家レベルでも解決できないとても難しい問題であることを認識できた。

資料 13　A 男の授業後の感想
　地球環境について世界で取り組んでいる活動を知ることができた。でも，なかなかすぐに活動できるわけではないことも分かった。地球環境の問題と学区でおきていることが意外に似たようなものだったのは驚いた。

A 男の感想でも，世界で取り組んでいる活動にも困難さがあることが分かった。でも，一方で取り組んでいかないといけない問題であることも認識できた。そこで，もう一度私たちができることは何か問い直して考えていくことを次時の課題として取り上げた。

単元最後の時間，今までの学習を通して，もう一回東海中学区という自分の足下の生活に視点を置き，自分たちに何ができるかを考えさせた。一人ひとり何ができるか考えてきたことを今までの学習を通して見直す場，いわば学びの問い合いの場を作ろうと考えたからである。一人ひとりの考えをより丁寧に取り上げる手立てとしてグループ活動を取り入れた。グループの話し合いを受けて，学級全体に話し合いを広げていった。話し合いでは，リサイク

ルやマイバックなど普段当たり前にできることを当たり前に行っていく大切さが出されたり，環境ボランティア活動に参加するという意見が出されたりした。その話し合いを受けて最後に，東海中３年５組として全員で何ができるかをまとめていった。「細かいことだけど，自分たちが活動することで環境を改善できる。」「私たちの考えもまんざらではないな。」という意見が出た。A 男の意見の「節電」という考え方も取り入れて，マイバックの利用，ゴミの分別，節電など「当たり前にできることをやっていこう」という内容が多くの生徒から出された。

資料 14　私たちができることを考えようの話し合いの主な発言
C1　ゴミのポイ捨てをしない。今残っている自然を破壊しないようにする。
C2　マイバックを利用して買い物をする。
C3　その地域にいてはならない動物などむやみに捨てないようにする。
C4　車の利用をなるべく少なくする。
C5　無駄な開発をしないようにする。
C6　ゴミの分別をしっかりやる。
C7　ボランティア活動に参加する。例えば，川のそうじとか。
C8　(A 男)家から出る CO2 を減らすため節電する。

A 男の授業を終えての感想では，地球環境の問題を身近な学区におきている問題と結びつけ，自分自身の課題となったことがうかがえる。自分たちが考えたことは，地球規模でも同じように考えられている。「自分たちが普段やっていることも，案外悪くないな」という意見がもてるようになったと考えられたのではないかと考えられる。A 男の環境問題に取り組みは，今後の生活の中に実感を持って行える活動となったと思われる。

資料 15　A 男の授業後の感想
世界規模で会議や CO2 削減などがやられていて，法律までなっていて，私たち一人ひとりが気をつけていかないといけないんだなと思った。実際に環境問題を行うのは難しいけど，環境問題に対して，今日考えたことのようにできることは少しずつで始めていくべきだと思った。

４．研究の成果と課題

① 異なる立場の違う知識や考え方を知り，それぞれの考え方を話し合うグループ活動や全体での話し合いの場を設けたことで，生徒の思考は深まった。特に，環境問題に対して何ができるか単元を通して 2 回発問している。2 回目の発問は，自分自身の考え方をもう一度見直す機会である「学びの問い合い」となり，自分自身の考えの再構築となり，自己の責任のあり方を考えることにつながったといえる。

② グループでの意見交換は，全体に比べて雰囲気もやわらかく（資料 2)，お互いの疑問点などを出し合い，突っ込んだ話し合いがなされていた。したがって，自分自身の考えを振り返る場として，また個々に追究したい課題を多面的な視点から捉えることができたといえる。

③ 新聞記事，ニュース映像，現地写真，統計資料などを利用したことで，生徒は疑問や考えを身近にとらえることができた。特に，学区のさまざまな資料では，第 3 時，第 4 時の話し合い（資料 8，10，11）の深まりからも，自分たちの身近な問題として引きつけることができたといえる。また，単元構成の工夫で，第 3 時に学区に視点を焦点化し，学区のイノシシについて深く追究する中で，イノシシ問題一つとっても難しい問題であると感想がでたことは，自分自身の問題として追究意識が高まることができたといえる。

課題しては，話し合いの中で根拠をもとに考えを伝えられない様子や，友達の考えと深め合うことができない様子が見られたことが課題である。十分な調べ学習と，適切な資料を用意して根拠ある考えをもって話し合いを行っていく必要があると感じた。また，話し合いに臨むための教師の発問も精選されるべきと痛感した。